フランスのワクチンパスポート

天理教リヨン布教所長
藤原　理人 *Masato Fujiwara*

衛生パス（Pass sanitaire）と呼ばれるフランスのワクチンパスポート

今夏、日本に一時帰国する機会を得た。筆者が帰国したのはオリンピック開催の少し前の7月11日であった。水際対策は時期あるいは出発地の状況によって日々変化し、私たちに行われた入国審査も先着した友人に聞いていたものとは微妙に異なっていた。おそらく現在はまた少し違ったものになっているのだろうと想像する。

関空に到着すると、順序よく陰性証明の提示、感染の有無を調べる検査の実施、到着後2週間の自主隔離中のアプリの使用方法説明へと流れるように案内された。2時間以上かかると言われていた入国審査であったが、各チェックポイント間をずいぶん歩かされたものの実際は2時間もかからず、思ったよりもスムーズだった。

その時期、フランスからの入国者は待機できる場所（自宅やホテルなど）での2週間の自主隔離が要請されていた。もし数日前に到着していたら、指定されたホテルで3日間待機しなければならなかったのだが、私たちの出発直前に解除された（現在は再び実施されているという）。

2週間の自主待機中、インストールさせられたアプリに毎日電話がかかってきた。AIの自動コールで録画させられるだけの時もあれば、人からの電話で直接会話をしたこともあった。それに加えて、GPSを使って登録した待機場所にいることの証明を求められる通知も毎日アットランダムにかかってきた。これらも友人に聞いていたものとは少し違っていたので、おそらく現在はまた微妙に違ったりするのだろう。いずれにせよ、この2週間はなかなか面倒な期間であった。待機場所の環境と家族の人数によってはかなりストレスがたまるものだと思う。

晴れて自主待機期間が終わった後、外出できるようになって感じたのは安心感だ。いつもの身の危険を感じない安心感もあるが、今回のコロナ禍に関しては、感染が拡大していた大阪や神戸の街中であっても、フランスのような感染リスクを肌で感じることはなかった。これはやはり常に清潔さを大事にする意識と、悪く言えば他人の目を気にする、よく言えば集団を大事にする日本人の気遣いがあるからだろう。フランスでは酒を飲んでいなくてもすぐにマスクを外すし、そもそもマスクを着けたがらない。実際、バスや地下鉄の車内などでも携帯電話で話すときにマスクを外す光景はよく見かける。現在マスク義務が解除された野外では、ほとんどの人がマスクをしていない。また手洗いの習慣もよくなったとはいえ、日本と比べると心もとない。新型コロナ発覚後、1年半以上たってもこれだけの感染数で抑えられているのは日本の特長が活きているからだろう。

一方、日本で医療崩壊が強く叫ばれている。国によって重症者の基準も、患者1人に対するケアのあり方も医療従事者の数も違うだろう。死者数の差もあるし、ワクチン接種数も違うのだから単純な比較は禁物だ。しかしどうしてもなぜかと思ってしまう。8月29日現在、フランスの重症患者数は2,259人（アプリTousAntiCovidより）、日本は全国で2,070人である（厚生労働省のサイトより）。新規感染者数もここのところ2万人前後で大差ない。フランスの常時の重症者病床数は約5,000あるらしく現在の占有率は45%、10%台まで下がっていた数週間前と比べるとずいぶん増えたが、特に医療崩壊は叫ばれていない。もちろん医療現場を知らない門外漢が言えることではないが、日本に滞在している間、いろいろ数字を見比べても明らかに日本の方がひどいとは言えない現状で、日本のような進んだ国がどうして医療崩壊するのかはついに分からなかった。

前置きが長くなったが、フランスは8月9日から衛生パスを実施している。ワクチン最終接種日の1週間後（国外への移動は2週間後）、ジョンソン＆ジョンソンだけは接種4週間後に有効化される。接種証明できるアプリ（TousAntiCovid）か紙の接種証明書を持参する。コンサートやイベント、テイクアウト以外の飲食店、国鉄利用などで提示の義務があるのに加え、2万平米を超える大型店舗でも提示を求められる。ワクチンを接種していない人は、72時間以内のPCRか抗原検査の陰性証明、あるいは11日以上6か月以内の陽性証明が必要になる（同上アプリより）。筆者の住むリヨンでも、いつも使う大型スーパーが衛生パスの提示を実施し、パスを所持しない人のための簡易の検査所を設置していた。

日本でも報道されているように、フランスではこの衛生パスに反対するデモが毎週末行われていて、8月28日の土曜日で7週連続となった。彼らはワクチンの接種自体に反対しているのではなく、一部職種（医療従事者ならびに8月30日からは接客を必要とする全職種）におけるその義務化と衛生パスによる自由の侵害に抗議している。しかし、フランス人の多くは衛生パスに賛成しているようだ。8月19、20日に実施されたアンケートでは、利用場所によって差があるものの、77%から64%が賛成している（飛行機や電車の利用については賛成数が多く、病院の出入りは賛成数が減少している）。ただし、若者の間ではぐっと減り、賛成率は53%から42%にとどまっている。また先述のデモについては54%の人が反対している。ただ衛生パスの実施が決まったとたんワクチンの予約が取れなくなったというから、日和見していた人たちが多くいたことも忘れてはいけないだろう。

本稿はフランスのライシテをテーマにしているが、コロナ禍を経験しその真っただ中にある現在、信教の自由の根本にある自由のあり方そのものにまで影響がでようとは思ってもいなかったというのが率直な感想である。パスがないために自由がなくなる反面、パスがあれば自由にやりたいことができる。自由を享受するために（もちろんウイルス感染を拡大させないという利他的な側面も大事だが）、衛生パスを優先するフランス人が多いというデータを見ると、自由を担保するのはもはや政治や共同体ではなくワクチンとなっているかのようだ。

［参照インターネットサイト］
（リンクは2021年8月29日時点）

「BFMTVの世論調査―フランス人の64%がバーやレストランでの衛生パスの実施を支持」（https://www.bfmtv.com/politique/sondages/sondage-bfmtv-64-des-francais-approuvent-la-mise-en-place-du-pass-sanitaire-dans-les-bars-et-restaurants_AN-202108230006.html）